

自発的特性推論における各種性格特性の処理の差異の検討

佐野 秀

(学籍番号：20PSM202, 指導教員：宮本聡介教授)

問題と目的

本研究は、様々な情報から他者の心理状態や性格特性を見定める「対人認知」に関するものである。対人認知場面に用いられる性格特性はRosenberg (1968)の知的望ましき、社会的望ましきの2次元モデルが代表的である。一方、近年の研究では能力、社交性、道徳性の3次元モデルが妥当であることが示されている(例:Brambilla, 2019; Goodwin, 2014)。同研究では、3次元モデルのうち道徳性次元が他の2次元よりも対人認知場面における評価をよく説明していることが示唆された。

本研究ではこの道徳性に着目し、道徳性次元が優先的に処理されるという現象を自発的特性推論の研究パラダイムを用いて検討することを目的とした。自発的特性推論とは、他者の行動を観察したときに、その人物の性格特性について推論する意図や自覚がなくとも行為者の特性を自然と探ることである(Uleman, 1989)。例として、ある人が電車で老人に席を譲った時、譲った人に対して「親切な人だ」と自然と性格特性を帰属することがあげられる。自発的特性推論の測定法の1つに、虚再認パラダイムがある。Todorov (2002)によると、虚再認パラダイムは記憶課題と再認課題の2つで構成されている。記憶課題では、ある人物の顔写真と行動文を対提示する。その後の再認課題では、顔写真と性格特性語を対提示し、記憶課題で顔写真と対提示された行動文中にその性格特性語があったかどうかを判断させる。この時提示する性格特性語は、行動文に含意された性格特性である。STIが生じている場合回答者は、誤って「あった」と回答してしまう、あるいは「なかった」と答えるまでの反応時間が無関係な性格特性語よりも長くなる。例えば、記憶課題では「Aさんは電車で席を譲った」という行動文と顔写真と対提示する。その後再認課題で「親切」や「知的」といった性格特性語を顔写真と対提示する。STIが生じた場合には、行動文中に含意された性格特性である「親切」に対して回答するとき、「知的」に対して回答するときよりも誤って「あった」と回答してしまう、あるいは「なかった」と答えるまでの反応時間が長くなる。

これまでの研究では対人認知に用いられる評価次元の意識的レベルの研究が検討されてきた。しかしながら、自発的特性推論という無意識的な現

象において能力・道徳性・社交性がどう作用するか、ということは明らかになっていない。そこで本研究では、自発的特性推論を性格特性ごとに虚再認パラダイムという方法で測定し、その処理に差があるかどうかを明らかにすることを目的とした。仮説は、「能力や社交性よりも道徳性のほうがSTIを引き起こしやすい」「ポジティブな道徳的性格特性よりもネガティブな道徳的性格特性のほうがSTIを引き起こしやすい」の2つであった(清水, 2010 参照)。

方法

実験は2(提示語タイプ:含意特性・非含意特性)×3(性格特性:能力・社交性・道徳性)×2(感情価:ポジティブ・ネガティブ)の3要因参加者内計画であった。実験は虚再認パラダイムを用いて各課題に対する参加者の反応時間と回答をコンピューターに記録した。参加者は18~24歳の60名の大学生および大学院生(男性8名、女性50名、その他2名、平均年齢=21.24)であった。実験内の操作チェックに違反した4名を分析から除外した。

結果と考察

分析の結果、感情価と提示語タイプの間($F(1,54) = 10.44, p < .01, \eta^2 = .005$)で交互作用が見られた。性格特性に主効果が見られたため多重比較を行ったところ、ポジティブな性格特性において能力と道徳性、能力と社交性の間には有意差が見られた(能力—道徳: $t(54) = 3.36, p < .01$, 能力—社交性: $t(54) = 2.01, p < .01$)が、道徳性と社交性の間には有意差は見られなかった($t(54) = 1.22, n.s.$)。以上より、仮説の一部を支持するように、ポジティブな場面において能力よりも道徳性と社交性のほうがSTIを引き起こしやすいことが明らかになった。対人認知場面では、ポジティブな行動に関しては、相手が知的か、有能であるかという能力に関する側面よりも、外交的か、親切かといった社交性や道徳性に関する側面を重視する傾向にあるということが示唆された。留意すべき点は、同様の効果はネガティブな性格特性においては見られなかったことである。

仮説2は支持されず、性格特性のうち道徳性のみ感情価と提示語タイプの交互作用が見られた

($F(1,54) = 13.88, p < .001, \eta^2 = .032$)。具体的には、ポジティブ感情価において提示語タイプの単純主効果が見られた($F(1,54) = 18.66, p < .001, \eta^2 = .013$)。つまり、ポジティブな道徳的性格特性がネガティブな道徳的性格特性よりも STI を引き起こしやすいことが明らかになった。経験に基づいて STI が形成されることから、日常生活の中で多く触れるポジティブな行動に対して STI がはっきりと引き起こされると考えられる。しかしながら、刺激・行動文においては未検討な点や課題が多くみられる。そのため、より明確に各性格特性が STI においてどのような働きをするか、ということを知るには今後さらなる検討が必要であろう。

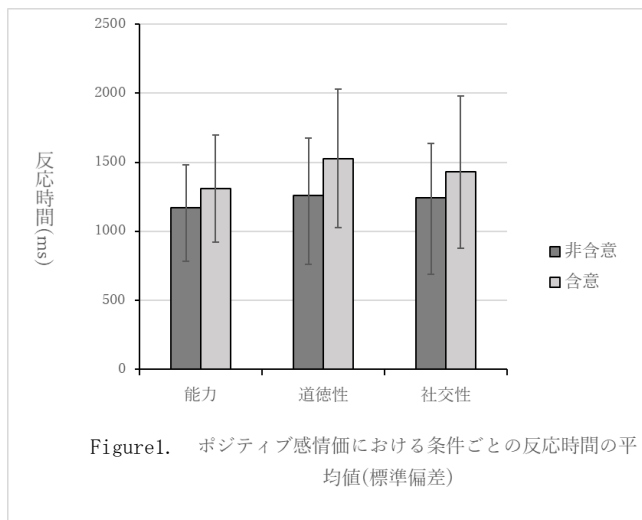


Figure1. ポジティブ感情価における条件ごとの反応時間の平均値(標準偏差)

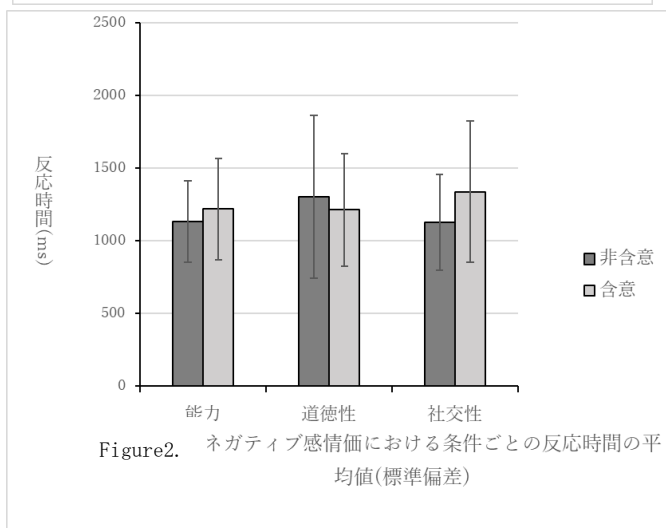


Figure2. ネガティブ感情価における条件ごとの反応時間の平均値(標準偏差)

主要引用文献

Brambilla, M., Carraro, L., Castelli, L., & Sacchi, S. (2019). Changing impressions: Moral character dominates impression updating. *Journal of*

Experimental Social Psychology, 82, 64-73.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of personality and social psychology*, 82(6), 878.

Goodwin, G. P., Piazza, J., & Rozin, P. (2014). Moral character predominates in person perception and evaluation. *Journal of personality and social psychology*, 106(1), 148.

Rosenberg, S., Nelson, C., & Vivekananthan, P. S. (1968). A multidimensional approach to the structure of personality impressions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 283-294.

清水由紀. (2010). 小中学生と大学生における自発的特性推論. *心理学研究*, 81(5), 462-470.

Todorov, A., & Uleman, J. S. (2002). Spontaneous trait inferences are bound to actors' faces: evidence from a false recognition paradigm. *Journal of personality and social psychology*, 83(5), 1051.

Uleman, James S., Leonard S. Newman, and Gordon B. Moskowitz (1996). "People as flexible interpreters: Evidence and issues from spontaneous trait inference." *Advances in experimental social psychology* 28, 211-279.

Wojciszke, B., Bazinska, R., & Jaworski, M. (1998). On the dominance of moral categories in impression formation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 1245-1257.

付記

本研究は著者による 2021 年度心理学研究科修士論文「自発的特性推論における各種性格特性の処理の差異の検討」における研究の一部として行われた。

